

## 臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 前眼部の組織像を別図 1 に示す。  
正しいのはどれか。2 つ選べ。
- a ①———虹彩色素上皮  
b ②———線維柱帯内皮網  
c ③———集合管  
d ④———強膜岬  
e ⑤———Müller 筋
- 2 眼底の組織像を別図 2 に示す。  
矢印の部位はどれか。
- a Bruch 膜    b Haller 層    c Sattler 層    d 網膜色素上皮    e 脈絡毛細血管板
- 3 眼底写真と Humphrey 視野検査の結果の組合せを別図 3 に示す。  
正しい組合せはどれか。3 つ選べ。
- a ①    b ②    c ③    d ④    e ⑤
- 4 コンタクトレンズの写真を別図 4 に示す。  
誤っているのはどれか。
- a 低含水率で酸素透過性が低い。    b 300 品目以上が認可されている。  
c 高度管理医療機器に分類される。    d インターネットで購入可能である。  
e 医薬品副作用被害救済制度が適用される。
- 5 50 歳の女性。4 年前から視力障害がある。頸部と膝窩に黄白色丘疹があり、遺伝子異常で起こる疾患と皮膚科で説明されている。視覚障害が遺伝しないか心配になり来院した。両眼の眼底写真を別図 5 に示す。  
遺伝形式はどれか。
- a 常染色体優性遺伝    b 常染色体劣性遺伝    c X 連鎖性優性遺伝  
d X 連鎖性劣性遺伝    e 母性遺伝
- 6 58 歳の男性。右眼の眼球突出を指摘されて来院した。眼窩 MRI 画像と病理組織像を別図 6A, 6B に示す。  
診断はどれか。
- a 腺癌    b 多形腺腫    c 腺様嚢胞癌    d 悪性リンパ腫    e IgG4 関連眼疾患
- 7 48 歳の女性。左眼の異物感と腫瘤に気づき来院した。視力、眼圧、中間透光体および眼底に異常はない。左眼前眼部写真を別図 7 に示す。  
治療で正しいのはどれか。
- a 穿刺    b 摘出    c 放射線照射    d 抗真菌薬投与    e 副腎皮質ステロイド点眼
- 8 10 歳の男児。両眼の掻痒感と充血および眼脂を主訴に来院した。涙液中総 IgE 検査は陽性。左眼前眼部写真を別図 8 に示す。  
適切な治療はどれか。2 つ選べ。
- a 抗菌薬点眼    b 免疫抑制薬点眼    c 抗アレルギー薬点眼  
d 副腎皮質ステロイド内服    e 非ステロイド性抗炎症薬点眼
- 9 8 歳の男児。下眼瞼にできものができたため来院した。視力は両眼ともに 1.2(矯正不能)。外眼部写真と病理組織像を別図 9A, 9B に示す。  
考えられるのはどれか。
- a 過誤腫    b 血管腫    c 霰粒腫    d サルコイドーシス    e スポロトリコーシス



- 18 72歳の女性。両眼の白内障に対して1か月前に手術を受けた。視力は右1.2(1.5×-0.50D), 左1.0(1.2×cyl-0.50D Ax 85°)。右眼前眼部写真を別図18に示す。  
この患者の自覚症状で頻度が高いのはどれか。2つ選べ。  
a 羞明    b ハロー    c 青視症    d 単眼複視    e 薄暮時のコントラスト低下
- 19 34歳の男性。幼少時から低視力で、これまで弱視と言われている。視力は両眼ともに0.1(矯正不能)。毛髪や皮膚の色調は正常。母方の親戚に同様の症状の男性が2人いることが分かっている。両眼の眼底写真を別図19に示す。  
正しいのはどれか。2つ選べ。  
a 眼振はない。    b 遮光眼鏡が有効である。    c ERGは陰性型である。  
d 黄斑の形態は正常である。    e 母親の眼底検査が診断に役立つ。
- 20 4つの異なる疾患のOCT像を別図20に示す。  
OCTの所見と病名で正しい組合せはどれか。  
a A: 中心性漿液性脈絡網膜症    B: 硝子体黄斑牽引症候群    C: 加齢黄斑変性    D: 糖尿病黄斑浮腫  
b A: Vogt-小柳-原田病    B: 低眼圧黄斑症    C: 黄斑前膜    D: 加齢黄斑変性  
c A: Vogt-小柳-原田病    B: 中心性漿液性脈絡網膜症    C: 加齢黄斑変性    D: 網膜静脈分枝閉塞症  
d A: 加齢黄斑変性    B: 中心性漿液性脈絡網膜症    C: 網膜細動脈瘤    D: Behçet病  
e A: 中心性漿液性脈絡網膜症    B: Vogt-小柳-原田病    C: 黄斑前膜    D: 糖尿病黄斑浮腫
- 21 34歳の女性。10日前から急に左眼の視力が低下し、視野が欠けたことを自覚している。左眼で見ると少し眩しさもあるため来院した。視力は右0.2(1.5×-6.00D), 左0.08(0.6×-5.50D)。左眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真およびOCT像を別図21A, 21B, 21Cに示す。  
正しいのはどれか。2つ選べ。  
a 若、中年者の近視眼に多い。    b 抗VEGF薬の硝子体内注射が有効である。  
c 硝子体中に雪玉状の混濁がみられることが多い。    d 網膜周辺部の淡い白点は瘢痕を残して治癒する。  
e 視力低下や視野欠損は自然回復することが多い。
- 22 61歳の男性。50歳頃から両眼の視力低下と視野狭窄が進行している。視力は右0.03(0.1×-3.00D ⊂ cyl -1.00D Ax 30°), 左0.04(0.4×-2.25D ⊂ cyl -2.00D Ax 130°)。兄と祖父が視力不良である。両眼の眼底写真を別図22に示す。  
正しいのはどれか。2つ選べ。  
a 常染色体劣性遺伝を示す。    b ERGは末期まで保たれる。  
c 原因遺伝子はCHM遺伝子である。    d 血中オルニチンの上昇がみられる。  
e 保因者の眼底には色素の脱出と集積がみられる。
- 23 53歳の男性。右眼の増殖糖尿病網膜症に対して硝子体手術を施行し、術後早期に眼底所見が改善したにもかかわらず、視力は0.02(矯正不能)にとどまった。術前のフルオレセイン蛍光眼底造影写真を別図23に示す。  
視力不良の原因で最も考えられるのはどれか。  
a 虚血性黄斑症    b 血管新生緑内障    c 虚血性視神経症  
d 牽引性網膜剥離    e 網膜中心動脈閉塞症
- 24 74歳の男性。左眼の変視症が出現したため来院した。視力は左1.0(矯正不能)。左眼眼底写真とOCT像を別図24に示す。  
最も考えられるのはどれか。  
a 黄斑下出血    b 脈絡膜腫瘍    c 網膜色素上皮剥離  
d 黄斑円孔網膜剥離    e 中心性漿液性脈絡網膜症







